

1. 研究目的

世界各国の家具が流通し外国化が進んでいる中、日本の伝統技術をうまく利用して、六畳間という一般的な空間を有効に使うことは出来ないかと考え、今回の研究に至った。

2. 調査と分析

家具屋やインターネット上で見られる商品は箱型で、面構成された機密性や大量生産に向けたものが多い。他に金属製の棚のような造りが細くても丈夫なものや、プラ製の軽い衣装ケース。自身で組み立てる物などがあり、カラーも茶系やベージュなどを筆頭に鮮やかなものからモノトーンに至るまで多種多様である。

友人宅を見るとフローリングが大半で、絨毯やラグマットを敷いている部屋もあった。棚や机を見ると、面構成された形状であり、茶や黒などの重めな色合いが多く、大きい家具は壁際に設置されていた。

伝統技法の現状としては一部の家庭やユーザーにおいて使用され、一般的に利用することはあまりない。また部屋の欧米化に伴い、扱いやすい家具の方へユーザーが流れるといった現状が原因だとも思われる。

3. コンセプトの立案

伝統技法を用いフローリング六畳間に合う多様な家具を制作する。床の特性を活かし和洋式を取り入れ、デスクと収納棚の機能を満たしているものが好ましい。個性的、有効的に空間演出をした人へアプローチする。

4. デザイン展開

見通しを良くするため指物技術を利用する。この技術は細めの棒材を利用して、接着剤や釘など金物を使わずに木を組み合わせて作る技術である。伝統技術でもあるスタッキングの仕様により空間演出に違いを出すことが出来るよう机、本棚、飾り棚の三つを用意する。

卓面は細工を活かしガラスになっていて筆記などがしやすい他、面部分が透明になることで部屋が広く感じられることを筆頭に、モダンな印象を出すことで利用し易いように考えた。そのため従来

のように壁に設置せずとも活用でき、インテリアに幅を持たせる事が出来るようになる。

5. 完成図



6. 結論

華奢であるがしっかりとしたアジアナ印象を受けるものに仕上がった。男女問わずに様々な人に検証して貰った結果、「華奢だから圧迫感がなくて使いやすい」「植物など置きたい」「色々な用途に使える」「軽くて持ち運びしやすい」「趣味の机にしたい」など、私自身の訴求点と合致した意見を頂いた。「手前側の渡しの棒が膝に当たってしまう」「足が組めない」「渡し部分に補強が入ったほうがもっと安心して使える」「足掛けはもう少し手前にあったほうが掛けやすい」等の意見も頂いた。

今回の研究で伝統技法の一部の再現ができ、成功したと思えるが、指摘された点を踏まえると人間工学や構造的な問題に対して更なる研究が必要であったと考える。

7. 参考文献

- ・図解「木工指物の継手・組手・仕口」
<http://www.fuchu.or.jp/~kagu/siryo/kumite.htm>
- ・指物 - Wikipedia
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8C%87%E7%89%>